

第3章 浜田市の歴史文化の特性

第1節 歴史文化の特性

第1章・第2章を踏まえ、浜田市の歴史概況や文化財の概要をもとに、歴史文化の特性を考えると、次の6つを設定することができます。

- 1 山に抱かれ、海に開かれた環境を有する浜田
- 2 旧石器時代からの遺跡が物語る黎明期の浜田
- 3 石見における政治的中心を担った浜田
- 4 港の発展と山間での生産に支えられた浜田
- 5 伝統文化を継承する浜田
- 6 先人の足跡を守り伝える浜田

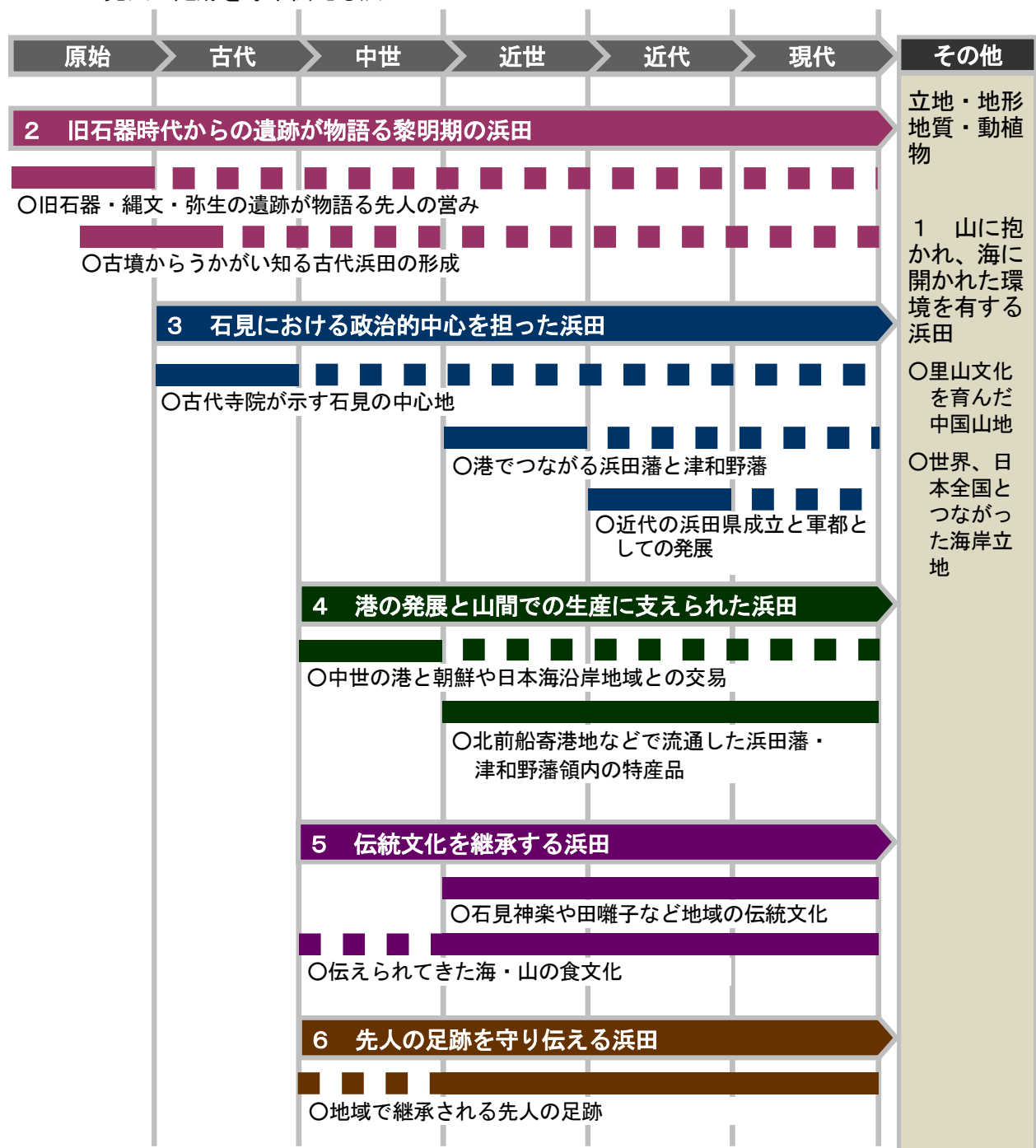


図 3-1 浜田市の歴史文化の特性の時代背景

第2節 歴史文化の特性の内容

1 山に抱かれ、海に開かれた環境を有する浜田

浜田市の山間部では、中国山地の地形や地質を利用し自然に寄り添った生活様式が形づくられ、沿岸部では、その海岸立地から、日本だけでなく世界ともつながることで、中世から発展してきました。このような起伏に富む豊かな環境は、浜田市の歴史文化の特性です。

(1) 里山文化を育んだ中国山地

中国山地は、東は兵庫県、西は山口県に続く東西約 500 kmの山地であり、中国地方の基軸となります。その稜線により山陰と山陽とが区分され、気候も前者は多雨、後者は小雨など大きな違いがあります。中国山地には、花崗岩の風化が進んだ比較的なだらかな山々が連なり、幾筋もの河川が流れ、大小の河岸段丘や盆地、谷間のわずかな平坦地などが形成されています。それほど厳しい気候条件でなかったこともあり、それらの多くに人々は定住しており、本市最古の遺跡である岩塚Ⅱ遺跡も所在しています。

また、江の川（支流）を含め多くの水系があり、滝や溪流といった名勝地も形づくっています。

さらに、山々には木々が豊かに茂り、これまで木材、薪炭材として活用されてきました。雨が多い地域のため、森林が再生しやすく、伐採後はマツなどに樹種転換していった瀬戸内海沿岸部とは大きく異なっています。

これら中国山地の地形・地質や植生は、木材、薪炭材の生産に加え、たたら製鉄、和紙（石州和紙）づくり、農業なども支え、二次林、植林地、農地等が混在した地域を形づくり、里山文化を育んでいます。



写真 3-1 盆地と集落（金城町波佐）

(2) 世界、日本全国とつながった海岸立地

本市を日本海から見ると、環日本海の南西側に位置し、かつ、東シナ海へとつながる位置にあります。朝鮮半島とは、海流が利用しやすい東西方向で最短で結ばれる位置にあり、朝鮮半島・中国大陆への窓口である博多・対馬とも近い距離にあります。

また、海岸線はリアス海岸と砂丘海岸からなり、複雑に入り組んだリアス海岸は天然の良港となり、中世の西日本海ルート、近世の北前船が利用した西廻り航路において、日本海沿岸部をつなぐ主要な港にもなっています。

中世の港町を特徴づける遺跡として、日本海から下府川を 2 kmほど遡るところに位置する古市遺跡があります。この遺跡からは、大量の中国製の陶磁器が出土し、「石見府中」と呼ばれた地域一帯の交易を物語っています。

近世において浜田藩内には、外ノ浦、瀬戸ヶ島、長浜という 3 つの貿易港がありました。その中心となっていた外ノ浦には、日和山方角石や船乗りが航海の安全を祈った金刀比羅神社も所在します。また、多くの船が出入りしている江戸時代の沿岸部の様子を描いた絵図や全

国各地から北前船が寄港していたことを示す客船帳も残されています。

近代以降も港の整備は進められ、重要港湾浜田港、浜田漁港へと発展していきます。

中世、近世、近代、現代と続く港町の歴史は、海に開かれた浜田の特性を表しています。



写真 3-2 海岸の景観

2 旧石器時代からの遺跡が物語る黎明期の浜田

浜田市には、旧石器時代から人々が暮らしていたことを物語る遺跡があり、さらに縄文時代・弥生時代の遺跡も数多く所在しています。古墳時代においても、石見地域最古の古墳や大型の前方後円墳、群集墳も所在します。

このように黎明期の浜田を物語る遺跡が多く確認されているのも、浜田の歴史文化の特性です。

(1) 旧石器・縄文・弥生の遺跡が物語る先人の営み

浜田市域は、旧石器時代から人々が暮らしていたことが岩塚Ⅱ遺跡（金城町今福）の調査で明らかになっています。出土した安山岩製のナイフ形石器はその特徴から約3万年前から約1万8,000年前のものと考えられ、この当時から遠隔地の石材を利用した石器が利用されていることがわかります。

縄文時代の遺跡は、山間部から沿岸部に至るまで10か所以上あり、最も古いのは、約8,000年前の日脚遺跡（日脚町）です。旧石器時代の遺跡でもある岩塚Ⅱ遺跡からは、縄文時代前期から後期までの遺物が出土しており、縄文時代になり、人々が定住生活を送るようになったことがわかります。

また、岩塚Ⅱ遺跡で出土した縄文時代の石器の材料は、黒曜石は島根県隠岐島、大分県姫島、佐賀県腰岳、安山岩は広島県冠山、香川県金山から運ばれたものでした。当時の人々は、ムラの周辺だけの孤立した生活ではなく、人と人との交流や流通があったこともわかります。

弥生時代の遺跡は、20か所以上が見つっています。周布川河口の鰐石遺跡（治和町）からは、浜田で米づくりがはじまったころの様子を知ることができ、道休畑遺跡（内田町と熱田町の町境）では、米、オオムギ、モモ、アワ、ヒエ等を栽培していたほか、トチ、クリ、クルミ、ヤマブドウなどを集めて食べていたこともわかりました。このムラは台地上にあり、堅穴住居の周りに畑を、台地の下を流れる川の近くに水田を作っていたと考えられます。



写真 3-3 鰐石遺跡の出土品

加えて、弥生時代の遺跡からは、祭祀の道具（木偶、銅鐸）も見つかっており、当時の人々の自然への感謝や畏れ、豊かな実りへの願いなどもうかがえます。

(2) 古墳からうかがい知る古代浜田の形成

浜田市には、古墳が 60 か所以上あり、また、当時の人々が生活していたムラの遺跡も市内各地で見つかっています。

本市で最も古い古墳は、3 世紀終りごろと推定される円墳である千年比丘^{せんねんびく}1 号墳（金城町長田）で、石見地域で最も古い古墳と言えます。墳頂部では3つの主体部が並んで確認され、内部調査が実施された中央主体上面では、直立した砥石と鼓型器台などが出土し、墓上祭祀が行われたものと考えられます。

その後、4 世紀後半から5 世紀初頭には、大型の前方後円墳の周布古墳^{すふ}（治和町）、6 世紀には、石見地域で最も古い横穴式石室を持つめんぐろ古墳（治和町）などが築かれます。

さらに、飛鳥時代に入っても古墳は築造され、群集墳であるやつおもて古墳群（旭町重富）や小才古墳群^{こさい}（旭町和田）も所在しています。

これらの古墳は、築かれた時期や形も様々であり、古墳時代の浜田の様子を連綿と物語っています。これらは地域を支配する豪族の存在にとどまらず、中央との繋がりも想起させ、ひいては古代浜田の形成の様子を知ることができます。



写真 3-4 周布古墳（治和町）

3 石見における政治的中心を担った浜田

浜田市には、石見国分寺（国分町）、国分尼寺（同町）などの古代寺院、浜田城とその城下町が所在しています。また、近代に入ると浜田県が成立し、軍都としても発展をしていきます。これらは、浜田が石見地域における政治的中心を担ってきた地域であることを示しています。

(1) 古代寺院が示す石見の中心地

浜田では7 世紀後半に、古代寺院の重富廃寺^{しげとみはいじ}（旭町重富）が建てられました。近くには、瓦を焼いた窯跡も見つかり、瓦をふいた金堂（本堂）などがあったものと考えられます。また、同じころ沿岸部でも、瓦をふいた金堂や五重塔をもつ下府廃寺^{しもこうはいじ}（下府町）が建てられており、浜田においては、石見の他地域よりも早く、当時の最先端技術を用いた古代寺院の建立がなされています。

また、奈良時代の浜田は、石見国那賀郡^{いかん（いかみ）ごう}にあたり、さらに伊甘郷^{いかん}（上府町・下府町周辺）などの郷がありました。伊甘郷は、中央からのびる山陰道の終点とされ、馬の管理などをする駅家^{うまや}（伊甘駅）も置かれていました。



写真 3-5 重富廃寺跡遠景（水田）

石見国府の位置は諸説あり定まっていますが、伊甘郷には古墳時代終末期の片山古墳や下

府廃寺などがあり、また、石見国分寺（国分町）、国分尼寺（国分町）などもあることから、石見国府はこの周辺に置かれて、石見の政治、文化、経済の中心地となったと考えられます。

石見地域で古代寺院は5つしか確認されていませんが、そのうちの4つが浜田市に所在しています。石見国府の存在も想定される浜田は、古代における石見の中心地でした。

（２）港でつながる浜田藩と津和野藩

元和5年(1619)、それまで銀山料（幕府領）であった沿岸部を中心に浜田藩が成立し、それ以外の内陸部は津和野藩によって治められることになりました。

浜田藩は、政治、経済、文化の中心となる城と城下町を浜田地区に建設し、今日にも続く浜田の礎を築きました。なお、現在でも城下町の痕跡を示す街区が所々に残り、浜田城においても江戸時代の石垣や郭を見ることができます。また、当時の城下町一帯の絵図も残っています。

内陸部に位置する津和野藩領では、地形を生かした水田開発（棚田など）や和紙の生産などを推奨するとともに、津和野城下町と領地とをつなぐ幹線道として、石見中通り往還（奥筋往還）を整備・充実させました。これらは、物流・交流を担い、藩の経済を支えました。津和野藩で生産された和紙や鉄は、馬で浜田の港まで運び、北前船により日本各地に流通しています。

このように津和野藩も浜田の城下町や港を利用することで、浜田藩ともに発展していたことがうかがえます。



写真 3-6 1670 年頃の浜田城下絵図

（３）近代の浜田県成立と軍都としての発展

慶応2年(1866)、第二次幕長戦争で浜田城は落城し、浜田は長州軍により明治2年(1869)まで治められました。長州藩の支配が終わると、旧銀山料の大森に拠点が置かれ、大森県が成立しますが、半年ほどで浜田に県庁が移され、明治3年(1870)1月に浜田県が成立しました。

さらに、明治4年(1871)6月には、津和野藩の廃藩と浜田県編入があり、石見全域が浜田県となり、浜田は島根県西部の行政の中心となります。浜田県庁は、現在の浜田郵便局（殿町）にあり、庁舎は旧津和野藩の御殿を解体して浜田に運び、明治5年(1872)に完成しています。なお、浜田県は、明治9年(1876)4月に島根県と合併します。

その後、浜田は、大陸に近く、港も発展していたことから、国を守るうえで重要な地であるとして、明治31年(1898)に歩兵第二十一連隊が広島から浜田に移されました。連隊は、現在の黒川町一帯に、兵舎や病院、訓練場などを建設し、道路などの整備も進め、浜田は軍都としても発展していきます。



写真 3-7 連隊の全景（黒川町）

4 港の発展と山間での生産に支えられた浜田

浜田は、中世より港を通じて日本各地や大陸と交易を行っており、それは今日に至るまで、脈々と受け継がれています。港の発展には、地形的な条件もさることながら、消費地の存在・魅力的な交易品も必要となります。中世においては、各在地領主のもとで交易がおこなわれ、近世になると山間部で生産された石見焼・石州瓦・和紙・鉄に代表される特産品が港より輸出されています。このように港の発展と山間での生産により浜田は支えられています。

(1) 中世の港と朝鮮や日本海沿岸地域との交易

浜田には多くの港がありますが、中世の港として広く知られていたのが、浜田、長浜、三隅の港で、朝鮮や日本海沿岸地域との交易を行っていました。

浜田の港がはじめて記録に出てくるのが、永禄5年(1562)に中国(明)でつくられた『籌海図編』です。浜田のことを「番馬塔」と記し、この時期には、明でも知られた港町であったことがわかります。また、天正3年(1575)に浜田に来た薩摩(鹿児島県)の武将・島津家久の日記には、浜田に着いた後に町を観光したことや浜田に来ていた薩摩各地の商人が、次つぎとあいさつに訪ねてきた様子が書かれています。このような港町の存在が、江戸時代になって、浜田に城下町がつけられた大きな理由となっています。

長浜の港は、文明3年(1471)に朝鮮でつくられた『海東諸国紀』に「長浜浦」、永禄5年(1562)の『籌海図編』にも「南高番馬」と記されています。長浜の港では、応永32年(1425)に朝鮮の船が、嵐で流れ着きました。この時、港を支配していた周布氏がこれを助けたことから、公式に朝鮮との貿易がはじまり、文亀2年(1502)までの78年間に49回も行われています。

三隅の港については、『海東諸国紀』に、応仁元年(1467)、港を支配する三隅氏が、朝鮮に使者を送ったことが書かれています。三隅氏がどのような貿易を行ったのかはわかりませんが、商人が活動する港町として発展していたことがわかります。また、永享4年(1432)に山口の大内氏が、三隅の商人から税金を取らず、自由な貿易を認めた記録も残っています。このことから、港の商人が、大内氏やその家臣である三隅氏と関係を持ちながら活動していたことがわかります。



写真 3-8 三隅の港 (三隅町湊浦)

このように中世においては、各在地領主のもと、広く朝鮮や日本海沿岸との交易を行い、港町の発展を促していました。

(2) 北前船寄港地などで流通した浜田藩・津和野藩領内の特産品

近世の浜田(浜田藩、津和野藩)の代表的な特産品として、石見焼・石州瓦・石州半紙・鉄をあげることができ、たたら製鉄を除き、今日に引き継がれています。また、北前船は、これらに加え、麻を加工してつくられた布の材料である扱苧、イワシを干して加工した肥料である干鰯なども扱っていました。

江戸時代の津和野藩や浜田藩では、紙の生産や販売に力を入れていました。津和野藩では、年貢を紙で納めることも許し、生産された紙は浜田藩領などの港にも運ばれ、北前船によって大坂方面で販売されました。

山間部においては、たたら製鉄により大量の鉄がつくられ、現在でも、広い間口が特徴のたたら蔵が残されています。山を切りくずして土砂を取り、その土砂を水で洗い流しながら、鉄の原料となる砂鉄を取る「鉄穴流し」が盛んに行われました。この過程で、現在も見られる棚田もつくられたといわれています。

また、石見地域では、質のよい粘土が取れることから、古くから焼物や瓦も生産されています。江戸時代の後期になると、来待石^{きまちいし}を粉にしてつくった釉薬を用いた赤茶色の焼物や瓦が盛んにつくられるようになります。この色が石見の焼物や瓦の特徴の一つであり、石見焼は赤茶色の水甕（はんど）やすり鉢などを中心として、白色や緑色の茶碗、壺なども生産されています。石見焼は、北前船などの船や大正時代に整備された鉄道によって、日本海側を中心に全国各地で販売されました。一方の石州瓦と呼ばれる赤茶色の瓦は、明治時代から急速に民家などの屋根に使われるようになり、美しい町並みを生み出しました。

このように主に山間部で生産された特産品は、浜田の港を介し、全国各地に流通し、浜田の経済を支えていました。



写真 3-9 たたら蔵（金城歴史民俗資料館）

5 伝統文化を継承する浜田

浜田市では、各地で石見神楽が盛んに舞われ、田植え・囃子行事、浜田大名行列奴などとともに、四季を通じて民俗芸能を体感することができます。また、海・山の多彩な郷土料理が継承され、民俗芸能の場を彩っています。

（1）石見神楽や田囃子など地域の伝統文化

浜田市では、石見神楽、田囃子^{たばやし}などの民俗芸能が各地で継承されています。

特に石見神楽は、浜田を代表する民俗芸能であり、今では神社やイベント会場などで、年間を通じて囃子の音が聞こえてきます。

石見神楽は、地域で信仰されている大元神^{おおもとじん}のための式年祭で舞われたものが起源と考えられ、面を着けない素面^{すめん}で扇子や幣などの採物^{とりもの}を持って舞う儀式舞と、装飾豊かで美しい衣裳と面を着けた神や鬼が舞う能舞^{のうまい}からなります。これは、一説に儀式舞で神をむかえ、能舞でむかえた神と人が、ともに楽しむことを意味するといわれています。

江戸時代の終わりごろまでは、神社の神職が集まって組をつくり、神楽を奉納していました。明治時代になり、政府の方針により神職が今まで通りに神楽を舞うことが難しくなると、その舞手が地域の人々に移るなど、神楽が変化していきました。ただし、奉納神楽においては、そ



写真 3-10 石見神楽

の舞台は変わらず神社の拝殿や神楽殿であり、これらは伝統文化を受け継ぐ重要な場となっています。

また、神楽の道具類では、明治時代に木彫面が石州和紙でつくられた張り子面に変わり、大蛇の衣裳が提灯から着想を得た現在の蛇胴に変わりました。また大正時代には、花火の使用や歌舞伎のような美しく飾られた衣裳へと変わっていきます。

このような多くの変化に対応しながら、石見神楽は受け継がれ、今や演目は 30 を超え、神楽団体も 130 以上（浜田市では 50 以上）となっています。

この他、春には田植え・囃子行事等が行われ、浜田大名行列保存会による浜田大名行列奴も見ることができます。

このように本市では、四季を通じて、石見神楽をはじめとした地域の伝統文化が残されています。

（２）伝えられてきた海・山の食文化

浜田市は海に面し、天然の良港があるため、人々がこの地に暮らし始めたころから、海と陸（山・川）の食に支えられてきました。

中世以来の港である浜田漁港は、県内屈指の水揚げを誇り、年間を通じ多くの種類の魚類、及び貝類、藻類が漁獲されています。スルメイカを漁獲する際に見られる集魚灯が沖で輝く漁り火は、浜田を表象する幻想的な風景にもなっています。

山の幸には、トウモロコシ、ジャガイモ、サトイモ、キャベツ、ダイコン、カブ、コメ等、多品種が生産されています。中山間地域では近世の鉄穴流しにより作られた棚田をはじめとした農地や農山村集落も見ることができ、文化的、景観的にも魅了しています。

現在、継承されている郷土料理は、いか飯、さば寿司、まき（草餅）、干し大根の煮しめ、角寿司、おいり（乾飯を炒って^{ほししい} 飴で固めた菓子）です。これらは、本市だけのものとは言えませんが、地産地消を基本に継承されてきた人々の知恵によるものです。

文化的、景観的に優れた農地や農村集落も含め、本市で漁獲し生産される食材、そして郷土料理などの海や山の食文化も継承されてきた浜田の伝統文化です。



写真 3-11 都川の棚田（日本の棚田百選）

6 先人の足跡を守り伝える浜田

浜田市の自然に恵まれた四季折々の美しい風景は、住む人の心に安らぎをあたえ、また心の支えにもなっています。浜田の風土には、政治、文化、芸術、経済、医学、教育、スポーツなど様々な分野で活躍する偉人を生み出す環境が備わっています。また、市内各地には、先人が残した様々な文物に加え、顕彰碑も多く建設されており、浜田には先人の足跡を守り伝えていく文化があります。

（１）地域で継承される先人の足跡

浜田は、郷土発展のために様々な分野で活躍した先人を多く生み出しています。

例を挙げると、江戸時代に生きた小篠敏^{おざさみね}は本居宣長に学んだ儒学者、国学者です。浜田に

藩校を開き、身分に関係なく学問を広め浜田の学問や芸術を振興しました。享和元年(1801)に浜田で没した敏の墓は、浜田市指定史跡として、大切に保護されています。

田中清見^{たなかすがみ}は、江戸時代から明治時代の石見神楽の舞の名手であり、氏子に石見神楽を教えた先駆者でもあります。清見が亡くなったあと、社中の人々はその恩に感謝し、細谷王子八幡宮境内(三階町)に「神楽之師 田中清見の碑」を建て、また、大元神社(大辻町)にも有志による顕彰碑が建てられています。

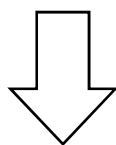
豊原喜一郎^{とよはらきいちろう}は、邑南町の浄泉寺、西蓮寺の山門とともに「石見三門」と呼ばれる正蓮寺(旭町木田)の山門を建築した名工です。なかでも正蓮寺の山門は、重厚な姿と優れた彫刻から石見一の山門と称賛され、現在でも大切に守られています。

また、「新劇の父」と称された島村抱月^{しまむらほうげつ}は、浜田市金城町の生まれです。金城町には、島村抱月文学碑公園、島村抱月生誕地顕彰の杜公園、島村抱月先生の碑公園と3つの歴史公園が設置され、その功績を顕彰しています。

このように地元の人により、大切にされてきた文物やゆかりの地、または顕彰碑などを通じて先人の功績をうかがい知ることができるのも、地域が先人の足跡を継承しているからこそといえます。



写真 3-12 島村抱月文学碑公園(抱月ふるさと公園)



浜田市の歴史文化の整理

浜田市の歴史文化の特性を包括的に捉えると、次のように表現することができます。

『日本海と中国山地に支えられ、街道・海道に培われた歴史文化』

浜田市域は、日本海沿岸部から中国山地の稜線まで広がっており、まさに山に抱かれ、海に開かれた環境となっています。ただし、それらは独立しているのではなく、山間部と沿岸部は街道で結ばれ、さらに沿岸部は海道により世界ともつながっています。

旧石器時代から今日まで続く多様な歴史や文化財は、日本海と中国山地に支えられた環境で生まれ、街道・海道を通じて培われたものと整理することができ、本市の歴史文化の特性として捉えることができます。